
理を春の世に

小林 太陽

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

理を春の世に

【Nコード】

N1565U

【作者名】

小林 太陽

【あらすじ】

昔、ある村に村人に忌み嫌われて殺された夫婦が居た。村には疫病が流行り、村人はこの夫婦を疫病神だと当てつけて殺したのである。――100年後、村は大きな街へと変貌していた。そして、その街に住むある医者是不思議な智慧を携えていた…。不思議な智慧を持つ街医者のお話。夫婦のあるべき姿、そして社会のあるべき姿を問う。

理と小春

ある小さな村の西のはずれに理おさむと呼ばれる男が居た。理はそれはそれは目立たぬ男で、十数頭の羊を飼い、伸びてきたその羊の毛を刈っては問屋に卸し、また家の裏でくるみの木を何本も育て、それを採取し生計を立てていた。

理の妻は小春こはると言って、これもまた目立たぬ地味な女であったが、二人は仲睦まじく細々と暮らしていた。しかし、村の者たちはこの夫婦のことをいつも忌み嫌っていた。

「わひゃー！西の魔女が出たで！！あっちいけー！！」

小春はいつもその地味な風貌を種に、罵倒され、子供たちから石を投げられたりもした。そのたびに、村の大人たちは子供たちを叱ったが、誰一人として小春に謝る者はいなかった。

ある日、村で病が流行ったことがあった。体中に発疹が出て、のたうち回るような痛みに襲われて、村人が一人、また一人と死んでゆくという病だった。

その病の原因が小春にあるのだと当てつけたある大人たちが、理と小春の住む家に火をつけて焼き払うという計画を練った。だが、そこに居合わせた一人の男がこんなことを言った。

「わしは反対や。わしは理さんに借りがある。3年前、川の土手で転げて滝壺に落ちそうになったときに、助けてもらったんや。だから、そんなことしたらあかん。わしは反対するで。」

「あんたもまた分からん人やの。あの夫婦は村の疫病神よ。村の山の向こうには妖怪のすむ小さな村があると聞いたとる。理は10年前、その村からやってきたんや。わしは知つとる、あいつが山から下りてくるとき、みたこともない皮の着物をきて、やってつきたことを。」

「そつだそつだ！あの夫婦がいるから村に災いがおきるんだ。あんな汚い小屋なんか焼き払っちゃえ。」

「…。」

村人はそのように相談し、次の日の深夜、理と小春の住む家に火をつけることにした。次の日の昼ごろ、理がくるみを市場に売りにやつてくると、火をつけると相談していた村人の一人とたまたま出会わせた。

「おお、こんにちは。理さん今日は晴れ渡って陽が昇ってますねん。まるで“火がつくかのような”暑さですのお。」

「…。どうも、こんにちは。今日は暑いんですの。…くるみが仰山とれた。お幾らになるかな？」

「…、この重さやと、10銭くらいかの。」

「…。…うん、ありがとう。」

その日の夜、理と小春はこんな話をしていた。

「春、今晚は寝るな。」

「…。どうして、また急にそんなことを。」

「…。いいから、寝るんじゃないぞ。」

そして、理は玄関の前にあぐらをかいて座った。その深夜、村人二人が予定通り、理と小春の住む家へと向かった。

「へっへっへっ。やつらは今頃、寝ているんだろうな。油はちゃんと持ってきたか？」

「たんとありまっせ。へへへ…。」

二人は家の近くまで来ると、足音を忍ばせ、軒先にあった牧草に火をつけようとした。すると、家の戸が開き、理が出てきた。

「ん？…あつ。」

理は二人の前までやってくると、こう言った。

「どうもこんばんは。何をしておるのでしょうか？」

「…。…うるせえ！この邪魔者め！！」

昼に市場で出会ったあの男だった。そして、村人二人は別に用意していたこん棒で理を殴りつけた。理は何度もこん棒で殴られ、瀕死の重傷を負う。そして、小春がそこに出てきて叫んだ。

「あんた！あんた！っ！！」

しかしその声は誰にも届かなかった。理と小春の住む家は、西のはずれにぽつんと佇んでいた家だったからである。

村人二人は容赦しなかった。理が生きていれば、悪い噂、いや事の真実を流されてしまうのではないかと恐れたからである。そして二人は、瀕死で気を失っている理を山のふもとにある川べりへ運んだ。小春は二人の男を追いかけたが、小春もまたこん棒で殴られ気を失って家から離れたところで倒れていた。

男二人は理を抱え川べりにつくと、そこで正気に戻ってきた。

「とんでもないことしちゃったでねえか。」

「ああ、ああ、早くこいつを滝壺に落として、捨ててしまわな！」

二人は理をもう一度担ぐと、月明かりの下、滝壺の前までやってきて理を投げ落としてしまった。

「しらねしらね、俺もうしらね。」

「ああああああ、逃げるぞ！」

男二人は月夜の晩、理を、こん棒も捨てて、走って逃げてゆく。小春は気を失ったまま、外に倒れたままだった。

次の日、小春の倒れているところにある男がやってきた。

「大丈夫かあつ！？大丈夫かあつ！？」

小春はその男に抱えられて、小春の家の中へ運びこまれて手当を受け、目を覚ますとこう言った。

「…理さん。」

「わしは理さんに借りのあるものですわ。…理さんはどした！？」

「…理さん！理さん！理さんは…あああああああああ…」

小春は泣き叫んだ。男は知っていた。男は本当のことを知っていた。この男は小春と理の家に火をつけると相談していた中に居た、あの男だったからである。

「わしが探してくる。あんたはここに居れ。」

「あたいも行く。あたいも…」

「あんたは行くな。家の裏に隠れておれ！！」

男は小春を抱え、家の裏の牧草の上に横たわらせると、あの滝壺へ

走って向かった。

川べりを辿って滝壺へ着いたが、そこには理の姿はなかった。

「理っさぁん…。」

男は理をその後も探しつづけたが、一向に見つかることはなく、諦めるしかなかった。

その日も村には疫病が流行りは陰ることなく、むしろ病は猛威を振るい、多くの子供や老人が毎日一人、また一人と亡くなっていった。火をつけ損ね、理を滝壺に落とした男二人は小春がまだ生きているのではないかと、家の前までやってこようと思ったが、顔を見られるのを恐れて、別の若い者を家へ向かわせた。しかし小春は若い者に見つかることはなかった。男が再び、小春と理の家にやってくる。と家の裏で護身用に持っていた短刀を首に突き付け、小春は自害していた。

こうして、理と小春の夫婦は家だけを残して、二人ともこの世を去った。理の遺体は滝壺から上がることはなく、小春はあの日あの男に滝壺の近くの土手に葬られた。男は何度も何度も謝りながら、小春の遺体を土手に埋めた。

その後、村の人口は病がその後も猛威を振るい半減したが、100年後にはまた人口の増加が見られ、一周り大きな街へと変わっていったのである。

そして、そこに理と小春のような夫婦が再び暮らしていた…。時は昭和の終わりの頃だった。

理と小春（後書き）

2話目は近いうちに投稿します。

信貴町

昭和62年、そこには信貴町なりと呼ばれる町があった。

この町は人口3万人弱ほどの小さな町で、東西3キロ、南北5キロほどの町である。信貴は畑作や果樹栽培を中心とした産業活動を展開していて、春は山桜が咲き美しく、山の清流にはアマゴではなくヤマメがまだ生息しているという近年では珍しい自然環境に恵まれていた所だった。冬が近づくと町民は冬支度を整えるために、昔ながらの保存食を作り、餅を練っては乾燥させ、白菜や大根の漬物などをこしらえる家々もまだ存在した。

町は中央に小石川という清流を挟み、東西に分かれていた。西方は山の手から順に、普賢地区、田折地区、西烏地区というように、東方は山の手から順に龍山地区、泉地区、東狐地区というように分かれていて、西烏地区と東狐地区は信貴北橋という橋で結ばれ、国道204号線が東西に突きぬけている。その国道の界限には、新設された町役場や図書館が建っていた。

南へ下り町境を越えると日出市という市があり、信貴町の住民は何か大きな買い物や病院への急患などがあると、その市へお世話になることが多かった。それで、信貴町の若者は十八歳を超えると上京する者も多く、高校進学の際は県立信貴高校ではなく、大体日出市にある市立近江高校へ進学する者が目立った。

信貴高校のある西烏地区は、役場や小中学校が安置されている東狐地区とは異なつて庶民的な地区であり、商店街や飲み屋街なども一部見られ、人口の増加と共に華やかな賑わいを幾分か見せていた。

一方で、街を北へ上に従い、果樹栽培や畑作などの農業地帯が広がる田折地区、泉地区では比較的高齢者が集い、更に清流の湧き出る山の手へ上ると普賢地区には町民から愛されている西ノ牧温泉、龍山地区には古くから町民に信仰されている龍山神社奥宮が存在した。小石川に沿って存在する県道56号脇にあるこの神社は、古く

からの言い伝えでは背後にある雷塚と呼ばれる山に降り立つ龍神を祀る神社だと言われている。この神社の前宮は西狐5丁目に存在していて、1月にはそこで祈願祭が毎年行われる。そして、この奥宮の脇にある清流の土手を伝って道無き道を奥へ進むと、信貴滝と呼ばれる滝と滝壺があつて、年配者などのごく一部では口を揃えて「あそこには近づくな。」と子供たちに言い伝えているという。それはつまり、今からおよそ100年前に起きた、理と小春の哀しい事件が根本にあり、それがいつの間にか民話となつて当時の若年者に広まつていたからであつた。今ではその民話を伝承する者はほとんど居なくなつたが、役場の前にある信貴の図書館にはその文献が残っているという。その事件は綺麗な民話に整えられていたが、年配の一部の方々には曰くつきの話としての記憶が未だ薄らと残っているのであつた。

信貴町東烏2丁目に住む、木下武はその民話の数少ない伝承者の一人であり、木下医院という個人病院を営む医者だつた。妻の紗枝さえは武の補佐役であり、木下医院を支える左腕であつた。この二人もまた地味な夫婦で、ごく平凡な街医者夫婦として町民から頼りにされている。ただこの医院の特徴は貧相な作りの建物ながらもとても良心的であることだつた。そして今日も患者が来院されて来られた。

武の触診

「こんにちは。今日はどうされましたか？」

「はい。この子、お腹の調子がよくないっていつて学校休ませたんです。二日前からずっとお腹が痛いって言ってますね。」

「ちよつと、お腹見せてくれる。触診します…。うーん、胃腸炎ですかね。」

「…そうみたいなんです。」

「…。おい、紗枝！」

紗枝がやってきた。

「はい、先生。」

「…胃腸炎。」

「…はい、わかりました。」

すると紗枝がその子のお腹に手を当ててしばらくしていると、一瞬怯えたような顔つきになって、すうっと息を吸い込んだ。紗枝はそのままカーテンの裏に行くと「ゲッフ。」とゲップをした。

それを聞いていた患者の母親が変な顔をしていた。

「では、薬出しておきますね。夕食後に一錠お飲み下さい。」

「あ、ありがとうございます。」

娘を連れてその患者は¥1200払うと医院を後にした。

武と紗枝は一見普通の街医者である。だが、その治療の裏には武の類まれな学と紗枝の巧みな技があった。

武は表向きは医者として通っているが、実は本業はかんなぎ呪と呼ばれるにわ審神であり、妻は巫みこと呼ばれるれいばい霊媒なのである。

審神とは巫に降りてきた神霊が、本物かどうかを判断する目利きの出来る特殊な男性のことである。

武が呪として活動する前は、ごくごく普通の医学生だった。しかし、24歳の冬に友人たちと龍山神社の奥宮がある雷塚の峠をバイクで走っていたときに、大きな事故を経験して生死の淵を彷徨ったので

ある。彼はその中で不思議な体験をした。

彼は事故直後に自分の肉体を傍で見ていた。自分が口から血を流して倒れている様子を傍で見ていたのである。

武は自分が二人居ることにびっくりしていた。武はパニックになって、周りの友人たちに何度も声をかけたが、誰一人として武の声に気付く者はいなかった。武が事故現場で自分の肉体を見ながら半狂乱になっていると、一人の男性がどこからともなくやってきてこう言った。

「武くん…。武くん…。…久しぶりやの。」

その男性はどこかで見たことのある顔の様な気がした。

「…僕、死んじゃったんですか！？どうなってるんですか！？」

「…。…まあ、ついてきなさい。」

男性は武の肩に手を掛けた瞬間、急に空間が捻じれて穴が空いて、そこに二人は吸いこまれていった。

そこはどこかの境内だった。よく見ると、それはあの奥宮の境内だった。

「武くん、心配せんでええよ。君はまた戻れるから…。」

「え？どういことですか？…おじさん、一体どなたですか？」

「失礼だな！覚えとらんかね。」

「…。」

「まあ、ええよ…。…ちよつとお茶でもするか。」

すると男性は神社の社に案内した。社の中には何人かの男女と見たことの無い動物が居た。

「お兄さん。御苦労さま。」

部屋の入口に居た女性が武にそう言ったので、武はそうように会釈した。武は丸い木卓の脇にその男性と一緒に座った。

武の夏

——あれは武が5歳くらいのときだった。

夏のある日、武は龍山神社の奥宮に友達家族と一緒にピクニックへ行った。神社の賽銭箱は古びて亀裂が沢山入っていた。境内といっても、ここは人の管理があまりゆき届いていない場所なので、雑草が猛威を奮うように生えていた。

母親達が談笑に興じて目を放している間に、武は武の友達の裕也と風子の三人で、川べりまで楽しそうに歩いていった。小石川の清流には、その透き通るような美しさの中に、力強い渦の流れがあった。武の三人は川べりで石を集めて遊んでいたのだが、彼はもつと形のよい石を探すために、一人土手を伝って上流の方へ向かっていったのである。

裕也と風子は武が居なくなってもお構いなしに、二人楽しく遊んでいた。それは長閑な信貴の夏の風情そのもののように思えた。

武が土手を伝って、信貴滝の近くまでやってくると、その土手の上に一人の女性が座っている。その土手の上から、女性の目の先には一人の男性が滝の傍で川釣りに勤しんでいる。武はそれをただ見ていたが、その視線に男性は気付いたのか、こちらを向いて微笑んでいる。しかし武はただそれを眺めていると、土手の所に腰を掛けていた女性が、武の方にゆっくりとやってきた。

「……どこから来たの？」

「……」

「あの、おじさんと一緒に遊ぼうか」

「……うん」

武はその女性に誘われて、男性の傍までやってきた。

「……おお、かわええの。どこから迷ってきたのかの」と男性は言っていた。

武にはその男性がとてもとても優しい人のように思えた。男性は

武の手を取ると、滝壺の近くの林まで連れてきて、その女性と一緒に平らな岩に腰をかけて三人でこんな話をした。

「君は武君というんだろ。おじさんはしってるよ」

「……」

「あんた、およしなさいよ」

「ははははは」

女性がそうに言うと、男性は笑っていた。

「……」

武がだんまりしていると、男性はこう言った。

「おじさんはの、この“山の麓にある家”にこの人と一緒に住んでるんだ。今日は誰とどこから来たのかの」

「裕也と風ちゃん、神社。西烏からママ、ママ……と来たの」

すると、男性の顔が一瞬強張ったように見えた。

「西烏……。時の流れを感じるの」

しばらく沈黙した後、男性はこう言った。

「武君、この山には龍の神様がおるんだよ。あの神社には……」

「あんた、およしなさい。……もう、武君ごめんね」

「……」

武は指をくわえて、女性の顔を見ていた。すると、女性が立ちあがってこう言った。

「ぼつや、ちよつと待っていてくれる？おいしい、おいしい、お菓子あげるからね」

「……、春。ええやないか、もうちよつとくらい」

すると、女性は林の奥に歩いていき、振り返って武に満面の笑みをした。それは武にはとてもとても優しい母の温もりのように感じられた。

武はまた振り返って男性の方を向くと、そこに男性の姿はなかった。武は不思議に思って、再び林の方を振り向くと、既にあの女性の姿も無かった。

しばらくすると、武はとてもとても寂しい気持ちになって嗚咽し

た。いま自分の居る場所がどこなのか？どのようにしてここにやってきたのか？が分からなくなっていたからである。そして陽は既に西に傾き、あたりは薄らと暗くなり始めていた。

武は急に怖くなつて、大声で「ママ～！ママ～！」と泣き叫びながら、清流に沿って歩いた。足場のよくない大きな石がゴロゴロと散乱していて、武は何度も転んで、膝を擦り剥いた。

しばらく歩いてから、武が何か視線を感じて振り返ると、滝壺のあった林の傍にあの女性が立ってこちらを眺めているのがおぼろげに見えた。しかし、幼い武にはもう何が何なのか分からなくて、何度も嗚咽を吐きながら、繰り返し母を求めて叫び続けた。

その頃、武の母親たちは裕也や風子が「武が居なくなつた」という話をしたのを聞いて、動揺しながら神社の所から走ってきた。

母親たちは懸命に夕刻過ぎの青黒い小石川の清流を搜索していたところだつた。

18時過ぎ、武は自力で母親たちの元まで歩いてきた。その大きな泣き声に気付いた母親たちも、声を頼りに上流まで歩いてきたからであつた。武は裕也や風子に泣き顔を見られて、とても恥ずかしい想いをしたが、母親に抱きついてようやく安堵した。

そしてあの日、武があつた男女が、信貴の民話に出てくる夫婦だとはいざ知らずに、彼は帰りの車の中で泥の様に眠っていた。

武の夏（後書き）

7月に書いていたものですが、今更第4話として更新させていただ
きました。5話は後ほど…。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1565u/>

理を春の世に

2011年10月10日02時00分発行